

山登り番組で女優が混浴に挑戦。地元のおっさんに見られ見せつけられる

「はーっ。すごい気持ちいいですねー。いい景色です」

女優の北山芽衣は、見晴らしのいい山の中腹に到着して、眼下の景色を見ながら、そう言った。

ショートカットの黒髪和風美人の女優、北山芽衣は山登り番組の収録のために登山の真っ最中だった。

2000メートルを超える山を登っており、その七合目に達しているところだった。

「あともうちょっとですねー。このまま登っていきます」

北山芽衣はそう言い、急峻な山道を登っていく。

カメラマンは後ろからパンツスタイルの北山芽衣のおしりを撮影していた。

意外とむっちりしている北山芽衣の丸みを帯びたおしりが、きれいな女性的な曲線を描いている。

うっすらと中のパンティの線も透けて見えていた。

この山登り番組の醍醐味の 하나가、この女性芸能人のおしりのバックショットだった。

多くの男性視聴者は、この後方下からのおしりを見上げるように撮るショットを楽しみにしている。

「北山さん、それじゃあ、次はあちらの道に進んでください」

同行している番組のスタッフが北山芽衣にそう声をかけた。

「えっ、登山道はこっちですけど、こっちに行かないんですか？」

北山芽衣は首をかしげながら言う。

「後で登るんですけど、その前に温泉があるみたいなので、そっちに行ってからにします」

スタッフがそう説明する。

「えっ、温泉ですか。そんなの聞いてなかったんですけど」

「あれ、おかしいなー」

番組スタッフが頭をかきながら言った。

番組スタッフと同行していた北山芽衣のマネージャーが、スタッフと短い打ち合わせを行った。

その後、北山芽衣のマネージャーが北山芽衣に近付いてきて耳打ちする。

「ごめん、芽衣。なんか温泉のシーンも撮りたいみたいでさあ、やってくれないかなあー」

女性のマネージャーが懇願するように北山芽衣に言う。

「温泉って、入浴シーンも撮るんですか？」

北山芽衣が驚きながら尋ねる。

「うん、そうみたい」

マネージャーが言いにくそうに答える。

「だって、私、この番組でもですけど、一度も入浴シーンなんて撮ったことないですよ」

「うん、それはそうなんだけどさ」

マネージャーは言いにくそうではあったけれど、話を続ける。

「でも、この番組はBS だけれど、貴重なテレビの仕事だし、スタッフさんの要望は断らない方がいいと思うんだよね」

マネージャーの言葉に北山芽衣の表情が少し曇った。

北山芽衣はかつては、ゴールデンタイムのドラマで主演級を務めるほどの若手女優だった。

でも、いまいち伸び悩んだ。

一時、お笑い芸人と熱愛報道が出たこともあったが、それも破局し、年齢は 30 代半ばに達していた。

若くはない年齢に達してはいるけれど、その清楚な和風美人の美貌はいまだ健在だ。

若いときと、ほとんど見た目が変わっていない。最近では、ドラマや映画などの女優の仕事よりも、こういったドキュメンタリー番組やその他の分野の仕事の方が多いくらいだ。

そんな北山芽衣だったが、つい最近、パフォーマーの男性と結婚したことを発表している。

結婚はしたものの、まだまだ芸能活動は続けていくつもりで、この山登り番組のレギュラーの仕事は貴重な仕事だった。

だから、番組側の要望にはなるべく応えたいとは思っていた。

それでも……。

「タオルとかでちゃんと身体は隠すんですよ

ね？」

北山芽衣は少し声のトーンを落として、マネージャーに確認する。

「うん、それは大丈夫だと思う」

マネージャーがそう言った。

「わかりました」

北山芽衣はそう言い、山頂に登る前に山の中腹にある露天風呂に立ち寄ることになった。

番組の一行は、露天風呂のある施設に到着した。

そこで、その施設を管理している老人が迎えてくれた。

「ようこそ。よく来てくれましたね」

「いえいえ、こちらこそ、今日のご協力ありがとうございます」

老人と番組のスタッフが話している。

「で、今日、露天風呂に入られるのはどなたで？」

老人が質問した。

「はい、あちらの北山芽衣さんです」

番組のスタッフが、北山芽衣の方を手で示しながら言った。

「ほーうお。こりゃべっぴんさんじゃないかい。

こりゃ、みんな喜ぶぞ。さっそく呼んでやろう」

「すいません。みんなとおっしゃいますのは？」

番組スタッフが老人に質問した。

「ここの露天風呂は混浴じゃからな、そりゃ、こんなべっぴんの女優さんを入れる機会なんてないだろうから、みんなを呼んでやろうと思っ

てな」

老人はそう言って、スマートフォンで何やら連絡をし始めた。

「ごめん、北山さん。なんか、ここ混浴みたいでさ」

番組スタッフが北山芽衣とマネージャーの元にいき、そう告げた。

「えっ、混浴ですか」

北山芽衣が手を口元に持っていきながら言った。

「うん、そうみたいなんだけど、大丈夫かな」

スタッフがそう言った。

「はい。やるしかないんですよね」

北山芽衣がそう言うと、スタッフの表情が晴れやかになった。

「ありがとうございます。それじゃあ、よろしくね」

露天風呂の施設を管理している老人は、この露天風呂を普段よく利用している男たちに連絡を続けていた。

スマートフォンを持っていない男には、直接家に電話をしている。

「おう、そうじゃ。えらいべっぴんさんが来てるんだって。こんなチャンス二度とないかもしれないぞ。そうじゃ、そうじゃ、もちろん、裸で入ってもら。女優さんのすっぽんぽんが見れるぞい。そうじゃそうじゃ、はよ来た方がええぞ」

「それじゃあ、こっちが脱衣場みたいなんで、北山さん、お願いします」

「はい、わかりました」

老人と番組スタッフの誘導で、北山芽衣は脱衣所に案内された。

「脱衣所は男女で分かれとるんだけどな」

老人が話し出す。

「露天風呂の方は混浴だから。あと、タオルとかは露天風呂には持ってきたらだめじゃぞ」

老人がそう告げると、時間が止まったかのように、北山芽衣とスタッフとマネージャーの表情が固まった。

「タオルがだめってどういうことですか？」

番組のスタッフが尋ねる。

「そのままの意味じゃが。露天風呂に入るときは、そうじゃろ。それがマナーってもんだべさ。身に何もつけない状態で入るもんじゃろ」

老人はにべもなくそう言った。

北山芽衣とマネージャーとスタッフの表情がみるみる曇りだす。

「ちょっと、待ってくださいよ。それだと、裸が見られちゃうってことになりませんか？」

マネージャーが質問する。

「裸を見るもなんも、風呂には裸で入るもんじやて。なあ」

番組スタッフが、老人に同意を求められた。

番組スタッフは曖昧に苦笑いをするだけだった。

この後、北山芽衣本人とマネージャーと番組スタッフの間で、急遽、話し合いが行われた。

そして、なんとか、タオル付で入浴できないかを老人に頼むことになった。

だが、老人の答えは手厳しいものだった。
「そんなのダメじゃ、ダメじゃ。タオル有で風呂に入るなんてありえんわ。それだったら、もうええわ。もうあんたらを風呂に入れさせんで」
老人はあきらかに不機嫌そうにそう言い放った。

この老人の言葉を受けて、再び話し合いに入る。

「お願いだよ北山さん。タオルなしで入ってくれないかな」

「嫌ですよ、そんなの。みんなに裸が見られちゃうじゃないですか」

「そこは、なるべく見えないように配慮するからさー」

「そんなこと言ったって」

「おーい、おやじー。来たぞー。べっぴんの女優さんっていうのはこの人かー」

「さー、混浴だ混浴だー」

「楽しみだべー」

老人が呼び寄せた男たちが続々と集まりだしてきていた。

「おー、この人かー。確かにきれいじゃなー」

「おー、こりゃええわい、ええわい」

北山芽衣たちの表情がますます曇っていく。

「どうする芽衣」

マネージャーが北山芽衣に尋ねた。

どうすると言われ、すべてを委ねられた北山芽衣であったけれど、この仕事の要望を断れば、

当然、この番組のレギュラーを外される恐れがあった。

芸能界とはそういう世界だ。

特に強いコネもないし、事務所が力を持っているわけでもない。

もう若くもないし、女優の仕事もなくなっている中で、この仕事を失うことはどうしても避けたかった。

「わかりました。タオルなしで入ります」

混浴露天風呂には、老人が呼んだ男たちが13人も集まってきていた。

全員が近くに住む地元のおっさんばかりだ。

全員が60歳を超えており、90代の老人もいる。

13人の男が既に全員入浴していて、それに加えて、この施設を管理している老人も入浴していた。

14人の男たちは、すでに全員が湯船に浸かり、北山芽衣が女性用の脱衣所から出てくるのをいまかいまかと待ち構えていた。

それに加えて、番組の男性スタッフも数名同行している。

カメラマンも1人いて、大きなカメラを構えている。

20人くらいの男性がいる前で、北山芽衣は裸を見せなければいけなかった。

女性用の脱衣所の扉が、がらがらと音を立てながら開いた。

「おおっ」「こりゃ、ええ」「眼福眼福」